

---

# BHT ~ 隻眼の天使 ~

高橋 A 全

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BHT～隻眼の天使～

### 【Zコード】

Z9657Z

### 【作者名】

高橋A全

### 【あらすじ】

家族をうしなつて行き場をなくした少女は、資産家の令嬢のご厚意で、メイドとして働かせてもらえることになった。忙しくも心休まる日々が続いたが、それもつかの間のこと、大恩あるお嬢さんに危機が迫ると知らされる。なんとかしようと困惑する少女の前に、凄腕のメイドがやってきて……。

むらむらしているBと、よたよたしているH-Tが繰り広げる、またたりとしたメイド系コメディー。

## プロローグ（前書き）

### <注意喚起>

「コメティイ」要素は割と弱めだと思われます。  
ですが、ジャンル分けで他に該当するものはありません。  
結果として「コメティイ」で投稿しております。  
お読みになる前に、その点を「了承ください」。

## プロローグ

大好きだった、お父さんが、死んだ。

突然あらわれたのは、黒ずくめの男のひとたち。

「遺体の確認をしてもらいたい」

それが、彼らの言い分だつた。その口調はきわめて事務的で、感情というものを感じさせることができなかつた。だから、わたしも何も感じることはなかつた。

これは夢か何かで、現実ではない、わたしはそんな風にしか感じていなかつた。

彼らに連れられて靈安室へと向かう最中も、わたしあはずつとふわふわとした非現実的な感覚に支配されていた。

暗い部屋。

寒い部屋。

狭い部屋。

白い布がめくられて、白い肉体があらわになる。

見慣れない顔。まるで違う顔。

お父さんはこんな顔をしていない。そう思つたから、別人だ、としか思えなかつた。

そのひとのほほに、触れてみた。

ぐにやぐにやとした、奇妙な感触。やつぱりちがうひとだ、とわたしは感じていた。

「これなら大丈夫じやないか」

男のひとがつぶやく。

わたしに聞こえないようにして、ひそひそと会話がかわされた後で、別の男のひとが、ささやくように言つた。

「写真を見ますか？ 無理に、とは言いませんが」

口調とは裏腹に、その表情と声は、強制的だつたように記憶して

いる。

差し出される写真に、目を落とした。

上方からぶら下がった縄。その縄が巻きついていた首。だらりと垂れ下がった体。

わたしの視線が、遺体の顔へと固定される。突き出そうになつている眼球。実際に突き出されている舌。紫色になつてている顔の皮膚。それは、今まで見た二エンゲンの顔の中で、いちばんひどいものだつたけれども、わたしには分かつた。わたしには分かつてしまつた。写真にうつる、天井からぶら下がつた物体が、まさにお父さんである、と認識された瞬間、わたしの中で何かがはじけた。

壊れて、砕けて、爆発した。

視界がぐにやりと歪んで、とめどなく何かがからだの内側からあふれだしてきた。黒ずくめの男たちがしきりに何かを口にしていたが、わたしには何も聞こえなかつた。まるで超大型の台風のような、すさまじいまでの何かがわたしの中で荒れ狂つていた。

大好きだったお父さん、優しかつたお父さん。いつもわたしの味方だったお父さん。

お父さんの笑顔が、永遠に続くかと思われるほど何回も、繰り返しわたしの目の裏に、スライド写真のように映し出された。気がついたとき、わたしはソファーの上に寝かされていた。

「やっぱり見せない方がよかつたかな」

男のひとたちの会話がぼそぼそと聞こえてくる。はつきりと覚えているのは、そこまでだつた。

この後のわたしの記憶は途切れ途切れになつていて、まるでテレビのチャンネルを頻繁に変えたときのように、飛び飛びになつてゐる。何度も耳にしたのは、

「『親戚は？』

という言葉だつた。わたしは首を横に振ることしかできなかつた。お父さんが勤めていた会社の方でも、親族の連絡先は知らなかつたらしい。後になってから知つたことだけど、お父さんは結婚する

ときに親族と大喧嘩をしてしまい、親戚一同から絶縁されていたようなのだ。

お母さんはすでに亡く、ただひとりの家族であつたお父さんが自殺してしまつたいま、わたしはひとりきりだつた。ときおり、中学校の担任の男の先生が、困つたような顔で付き添つてくれているだけだつた。

お父さんのお葬式のこととか、お墓のこととか、そんなことを聞かれても、わたしには分からなかつた。まして、お父さんが管理していたお金のことなんて何も知らなかつた。

ゾウワトイとか、オウリヨウとか、そんなものは、わたしは理解できなかつた。

カタクソウサクと一方的に言われて、自宅は乱暴なひとたちによつて踏み荒らされた。

「お父さんは、そんな悪いことはしていません」

そうつぶやいて、わたしはただうつむくことしかできなかつた。大家さんは、「今すぐにでも出ていってほしい」と、言つた。

わたしが首を振ると、「さすがに犯罪者の娘は恥知らずだ」と、怒鳴られた。

どうしたらしいのか分からなかつた。

大家さんだけではなく、マスクミミだと名乗る人たちも、家にやつてきた。電話や玄関のベルが鳴り続けて、わたしはおふとんの中ですっと震えていた。

お父さんの遺品をかたづけよつとしても、思い出すのが怖くてさわれなかつた。

わたしは、家の外へと逃げた。明日のことはもちろん、今日のこともすら考えることができないままに、わたしは公園のブランコに、ひとり座り込んでいた。

とにかく、わたしはお父さんに会いたかつた。

泣きそうになつて、何度もそれを我慢した。

『わたしは泣かない』

それは、お母さんが死んだときに、お父さんと約束したことだつた。

お父さんが死んでしまった今となつては、約束だけでも守らなければならなかつた。

じぼれそうになる涙と戦い続けるうちに、あたりは暗くなり始めていた。どうすることもできないままに、わたしが顔をあげたときのこと。

音もなく、一台の真っ赤な車が公園の入り口に止まつた。  
大きくて、すゞく高そうな車だつた。スーツ姿に制帽をかぶり、  
丸メガネをかけた若い女性が、運転席から降りてくると、後部座席  
のドアをうやうやしく開けた。

そのときのことを、わたしは今でもはつきりと覚えている。  
運転手の女性が差し出した手に、みずからの白い手を重ねた人物  
が、ゆっくりと落ち着いた動作で大地に降り立つた。  
舞い降りた、といつた方が正しかつたかもしれない。

車から現れたのは、ひとりの女のひと。

流れるような美しい長い髪。すらりとした長身。抜けるように白  
いその肌。一流の彫刻家がつくりあげたかのような、完璧な顔立ち。  
左目に、なぜか白い眼帯をつけていたが、それすらも神々しい装飾  
品にしか見えなかつた。

わたしの目は、吸い寄せられるようにその女のひとに釘付けにな  
つた。

わたしは、天使に会つた。

その女のひとの背中に、白い羽が生えていないのがとても不思議  
だつた。

その天使さまがわたしの方へと、ゆっくりと近づいてくる。  
心臓が、ばくばくと高鳴るのがわかつた。呆然と、いや陶然とし  
て眺めるだけのわたしの前で、天使さまが足を止めた。レースの手

袋に包まれた手が、わたしに差し出される。

「さあ、いらっしゃい」

言われるがまま、わたしは、つやつやしく天使さまの手をとった。

「おーい雪ん子、どうだい？　だいぶ、慣れてきたんじゃないのか？」

わたしは、背後から声をかけられて振り返った。声の主を確認すると、目線を上方に向ける。そのひと、清水拭乃さんは、わたしよりも頭ひとつ以上も背が高いからだ。

「えと、そう、ですね。慣れてきた感じはします、よ？　でも、まだ皆さんに迷惑をかけてばかり、ですけど……」すこし考えたあとで、正直に答える。

「いや、そんなことはないぜ。けつこう助かってるよ」わたしと同じメイド服を着ている拭乃さんは、手にしていたモップの柄をくるくると手の中で回すと、ニッ、という感じで笑顔を見せた。「たしか……そろそろ三週間になるんだっけか？」

「えと、そうです。ここにきて一ヶ月になりますから」わたしは両手の指を折った。

「数えるのが、雪ん子らしいぜ」

拭乃さんは、けらけらと笑つた。その笑顔は、長身や短髪とあいまって、ボーグ・シューな印象を強く受ける。とってもカッコいい。もし、わたしが通う中学校に在籍していたら、むしろ女の子からのラブレターをいっぱいもらひそうな、そんな感じの女性だ。

その拭乃さんが、いじわるそつなのに、不思議と魅力的な笑顔で言つ。

「そうだ、あと十日したら、一ヶ月記念、つてことで、みんなでお祝いでもするか？」

「え、え……そ、そんなのいりませんよお」

顔が、すこし赤くなるのがわかつた。拭乃さんはわたしのことをからかっているのだ。それくらいのことはわかる。

わたしは「三袋の口を結びながら、照れかくしのために笑つて訊

いた。

「つぎ、何をしましょう、か？」

拭乃さんは、もう一度モップをくるくると回した。「そりだなあ、掃除はもういいから、菜花を手伝ってくれるか？」

「はい、わかりました」わたしは、ペコリと頭をさげた。

わたしが、ここのお屋敷にお世話になるようになつてから、そろそろ三週間になる。

天使のお嬢さまから『自分のメイドになつてほしい』と言われ、はじめはただビックリした。そもそも、あまりにも唐突なお話であつたし、くわえて、メイドさんなるものが、どんなものなのか、わたしにはよくわからなかつたからだ。

それでも、何しろわたしには行くあでがなかつたし、生活のあてもなかつたから、とにかく話を聞くだけでもよいかな、と思つてお屋敷にやつてきたのだった。

そこで、いきなりメイド服に着替えさせられてしまった。

わたしがおろおろしているあいだに、『いま』まとることは、すべて処理されたみたいだつた。家にあつたはずの、わたしの私物とお父さんの遺品は、いつの間にやらお屋敷に運び込まれていたし、賃貸物件だつたおうちの退去手続きも終わつていたのだ。

呆然としていた時間が過ぎたあとで、わたしは冷静さを取り戻した、つもうだつた。

いくらなんでもさすがにこれは、と思って、あわてて部屋から廊下へと出たところで、天使のお嬢さまに出くわした。

「これから、よろしくお願ひね」

極上の、天使さまの微笑みが、まさに目の前にあつた。

気がついたとき、わたしは自然な動作でうなずいてしまつっていた。

そのあと、冷泉添華さん このひとはお嬢さまの秘書だと いう、黒っぽい色あいのスースを着た、クールな感じの女のひとが、別室で色々と説明してくれた。

この大内家は、かなりの資産家であること。

大内家が所有している会社も、いつぱいあること。

わたしのお父さんは、そんな会社のひとつで働いていたこと。

お父さんと、天使のお嬢さまには、わずかだが面識があったこと。  
何かあつたとき、娘の小雪のことをお願いします、とお父さんから頼まれていたこと。

「幸いにも、夏休みに入つたばかりです。さまざまなことが落ち着くまで、このお屋敷にいた方が良いと思いますが」

添華さんの口調は沈着で、説明は的確だった。とてもたくさんの情報を、頭の中で整理するのにすこし時間がかかつてしまつたけれども、最後にわたしは同意した。

「とりあえず、夏休みが終わるまで、お世話になります」

そう言つて、わたしは頭を深くさげた。

そのとき、『夏休みになつたら、一緒にディズニーランドに行こう』というお父さんとの約束が、永遠にお流れになつたことを、わたしは思い出していた。

お父さんが死んだ、といつゝことを、わたしはあらためて実感していた。

涙をこぼれるのに、ちょっとぴり努力が必要だつた。

『菜花を手伝ってくれるか?』  
と、清水拭乃さんに言われて、わたしが向かつた先はお台所だつた。

鍋島菜花さんは、お屋敷のお料理全般を担当しているメイドさんである。

まだ二十歳かそこらなのに、和食・洋食・中華にデザートと、ひとりでなんでも作れてしまった名コックさんなのだ。

菜花さんを手伝つところじとせ、お料理を手伝つところじである。菜花さんの腕前を近くで見られるので、わたしにとつても色々と勉強になることが多いし、何よりわたしもお料理が好きだから、お手伝いをするのが一番好きだつた。

「菜花さん、失礼します、よ?」わたしがペロリと頭をさげる。  
ふたつのおさげを揺らして、菜花さんが振り向いた。「あ、こむちゃん、こりっしゃーい」

「あの、拭乃さんに言われて、お手伝いを」

「あら、ありがとうね」菜花さんが、にっこりと微笑んだあと、ふちの太いメガネの奥の両眼を天井に向けて、すこし考え込んだ。「うーんと、じゃあ、そこのおじやがの皮を、しゅるしゅるとむいてくれる?」

「はい、わかりました」

わたしは、水洗いされてざるに載つていたじやがいもを取りあげると、用意されていたピーラーで皮をむいていった。結構な量のじやがいもなので、丁寧かつ手早く作業しなければならない。

量が多いのには、理由がある。

いま、このお屋敷には、わたしたちメイドさんを含めて八人がいるのだ。お嬢さまのお食事は、菜花さんが最初から最後まで腕によりをかけるので別格としても、まかないだけでも七人分つくらない

といけない。つまり、わたしの皿の前にあるのは、のじる七人分のじゃがいもとなる。

ピーラーで大まかに皮をむくと、わたしは包丁に持ちかえた。刃の角のところを使い、芽の部分を取り除いていく。こじを丁寧にやらないと、おいもの大きさがどんどん小さくなってしまうので、わたしはすこし緊張した。

菜花さんがにじりと笑つた。「やつぱつ」おじちゃんは上手ね。たすかるわ」

「え、え……そ、そんなことないです、よ?」おじやぴり顔が赤くなる。

「でもねえ、前にふあぢゃんに手伝つてもらつたときは、おじやが立方体になつてたわ」

「拭乃さん、お料理苦手なんです、か?　お掃除はあんなに得意なのに」

「苦手といつか、あまり好きじゃないみたいなの。清掃員じゃないでメイドなんだから、仕事に好き嫌いはダメよ、って言つてはいるんだけどね」

「はあ、なるほど」そう心じながら、わたしはメイドさんにつっこえていた。

「お屋敷にくるひとたちが、メイドといつ呼び方をしてくるけど、実際のところ、ふつうの家事手伝こと変わらないのかな、わたしは感じていた。しいて言えば、服装がメイド服といつだけのことである。

わたしは父子家庭で育つたけど、お父さんはお世辞にも家事が得意とは言えなかつた。わたしは小児科から、お母さんの代わりに家事全般をやつていたので、得意とはいえないにせよ、ほとんどこの家事には慣れていった。

だから、菜花さんが言つたことは、正しいのだ、とわたしが思つた。

わたしなんかでさえ、ひとつおりはそれなりにできる。だから、

家事というのは才能の有無はあまり関係なくて、慣れているかどうかが大きいのだと思えた。菜花さんの『好き嫌いはダメ』というのは、たぶんそういう意味なのだ、と思つ。

じやがいもの皮むきが終わると、今度はにんじんを手に取つた。同じようにペーラーで皮をむく作業に専念する。あっちのボールに玉ねぎがあるのを見ると、どうやら今夜のまかないはカレーライスではないか、とわたしは判断した。

すると、お嬢さまのお夕食はポトフかな、とわたしは想像した。お嬢さまがカレーということはあり得ないからだ。別に、カレーがお嫌いということではない。刺激の強いものは食べとはいへないらしいのだ。詳しい理由は知らない。

詳しい理由は、知つてはいけない。

『お嬢さまのプライベートに関しては、あまり訊いてはいけない』  
お屋敷の中には、そういう空気が漂つっている。

そのことは、ここに来てまもないわたしにも、わかつていた。

そういう微妙な空気を読み取る力は、お父さんの事件があつてから、だいぶん上達したのではないか、とわたしは感じていた。原因といい経緯といい、結果に自信をもつてよいことなのかどうか、わからないけれども。

にんじんの皮をむきおわつて、わたしは玉ねぎをチラリと見た。たぶんつぎは、あれをきざまないといけないのだと思つたが、正直なところ田が痛くなるのはつらい。こういうときは、メガネをかけている菜花さんが、すこしうらやましくなる。

そんなとき、台所の方から、ペーペーという機械音が聞こえてきた。

「あ、お洗濯が終わったみたいだから、るるちゃんのところに行つてあげて」

「はい、わかりました」

内心で胸をなでおろし、玉ねぎにバイバイをすると、わたしはペーペーと頭をさげた。

わたしがサンダルに履きかえて、中庭に出たところで、洗濯かごを両手で抱えている、河野流瑠ちゃんと出くわした。

「あ、流瑠ちゃん、お手伝いにきたよ」

「おひ、サンキュー、ゆつきー。じょじょじょま、脱水がおわったとこりだよん」

流瑠ちゃんはウインクしてみせると、ショートカットの髪を揺らし、ニカツと笑った。流瑠ちゃんはいつも元気いっぱいで、一緒にいると、わたしも元気になるように思えて、ちょっとびり嬉しくなる。流瑠ちゃんは、わたしと年がひとつしか変わらない。

つまり、中学三年生のはずで、そんな若さでこのお屋敷に住み込みで働いている。何があったのか、わたしはもちろん訊かなかつたし、流瑠ちゃんの方も、わたしに何があつたのか、たずねることはなかつた。

だけど、なんとなくだけ、心の奥底の方では通じるものがあるのではないか、とわたしは感じている（一方的にだけ）。流瑠ちゃんの方が年上だし、メイドさんとしても先輩だけど、『ちゃん』付けで呼ぶことを許してくれたし、わたしもそれに甘えていた。

「よつ、こら、せつと」

「よこしょ、よつと」

ふたりで掛け声を合わせて、お洗濯ものを運んでいく。行く先是二階にある、乾燥専用のお部屋だった。

わたしはこのお屋敷にくるまで知らなかつたのだけど、こうこう高級住宅街では、お洗濯ものを外に干してはいけない、のだそうである。

景観上の問題らしいのだけど、お洗濯ものをひとまの下で干せないのは、何となく残念になる。さすがに、シーツとかタオルとかは乾燥器にかけるけど、いまいちまとしたものや、痛みやすいものは

室内に陰干しある」となる。お部屋を暖気して、換気する」という乾かすのだ。

じつは、このお洗濯と乾燥が、かなりの重労働である。お掃除やお料理टベリべると、体力の消耗がはげしい。気がついたときには、ふつふつと汗をかくことになる。それでもこれが終われば、ちゅうとひと休みできるのだ。

お掃除、お料理、お洗濯。

いつもやつて、色々と体を動かしてみると、思つてみると時間がたつのが早い。

この一ヶ月ほどは、わたしの生活はこんな感じだ。お屋敷にいるメイドわんたちの、誰かしらのお仕事をお手伝いしているのだ。もちろん、お手伝いできないものもある。

たとえば、メイドの安国寺智恵さん。このひとは事務処理を担当していて、しかもお嬢さまの家庭教師的な立場を兼任している。なので、智恵さんではなくて、智恵先生とお呼びすることが多いのだけど、このひとのお仕事はお手伝いできない。事務として扱っている書類には、ときとしてマル秘な内容のものも含まれるからだ。むしろ逆に、

『安国寺さんのお部屋には、勝手にはいらないよう』

と、秘書の冷泉添華さんからきびしく言われているくらいだ。部屋の前に出している、シロレッダーされた書類の「ミ」を片付けるくらいには、許されていいけど。

あとは、丸田輪わんのお仕事も、わたしではちょっとお手伝いはできない。そもそも、輪さんはメイドさんではなくて、運転手さんである。あのとき公園に止まつた、真っ赤な高級車（お嬢さまの専用車だー）を運転するのが、まさに輪さんの仕事なのだ。

しかも運転するだけではなくて、車の整備も自分でやってくる。さらに整備できるのは車だけではなく、機械全般におよぶ。おつきなどころでは電動式の門扉とか、業務用だと思われる大きな冷蔵庫や洗濯機など。ひとつちやなどころではパソコンやミシンはもちろ

ん、腕時計の修理までなんでも「やれなのだ。

女の子で、しかもまだ十代なのに、輪さんは機械にめっぽう強い。自慢ではないけど、わたしなんかは、ビデオの予約録画の操作にも自信がない。機械はダメ。だから、輪さんのお仕事はお手伝いできないのだ。なんか、わたしが触ると、機械が色々と壊れてしまいうな気さえするし。

あとは言つまでもないけど、秘書をされている添華さんのお手伝いなんかは、とんでもないことなので、とても無理なお話だつた。だから、わたしができるお手伝いは、次のみつづつ。

清水拭乃さんのお掃除。鍋島菜花さんのお料理、河野流瑠ちゃんのお洗濯。

たつたそれだけのことだつたけど、みなさんのお仕事をお手伝いしていると、けつこう忙しい。なので、余計なことを考えずに済むのが良い。

心が苦しいときは、くとくとなるまで体を動かしてしまえば、すこしは楽になる。

これは、このお屋敷に来てから学んだことだつた。

すくなくとも、何も考えずに、べつすりと眠ることができる。

それが、その場しのぎの逃げにすぎないとわかつていても、いまのわたしにとっては、とても大事なことであるかのように、思えるのだった。

それから、じばりくたつてからの「」。

鍋島菜花さんが、やかんを火にかけて言った。「じゃあ、すこし休憩にしましょうか」

「輪さんもお呼びします、か?」わたしは、拭き掃除の手を止めて訊いた。

あいかわらず、モップをぐるぐる回している清水拭乃さんが応じる。

「ああ、頼むぜ」

「あ、じゃあ、わたしが呼んできます、ね」わたしはふきんを流しのそばにおくと、駐車場の方へと足をむける。

菜花さんが休憩を提案した、ということなんだと、最近わかつてきた。さまたちが休憩をとった、ということなんだと、最近わかつてきた。菜花さんがお嬢さまのお部屋にお茶を運んだあとで、わたしたちもお茶をいただく、という流れになつてこる。つまり、お嬢さまとわたしたちが同時にお休みを取るわけで、そういうことで、わたしたちが休んでいる間に、急に呼びつけられてお仕事を任される事態が起つことにくなるのだ。

そういうのは、メイドさんとしての知恵なのかな、と思つ。菜花さんは、高校を卒業してからこのお仕事についたとのことなので、まだ一年かそこらしかたつていなこと思つけれども、このあたりの気の使い方はすくく上手だと想つ。きっと、もともとそういう心配りができるひとなのだろう。

さて、駐車場についたといひで、わたしは周囲を見渡して、丸田輪さんの姿を探した。

いつもだつたらこのあたりで、お嬢さま専用の真つ赤な高級車を、整備しているはずなのだけど……。

「あれ、れ?」わたしはびっくりして、思わず声をあげた。手に付いた油汚れを拭き取りながら、輪さんが姿をあらわす。「

おや、ゆきひやん、ビッグしたスか?」

「あ、えと、輪さん、いま、お茶が入るので、お呼びしようかと思つたんですけど……」

わたしは、あとに続く言葉を飲み込んだ。

前にも言つたけど、お嬢さまに關することは、訊いてはいけないことになっている。

くわえて、わたし自身がただの使用人、という立場である以上は、お嬢さまとの関係の有無にかかわらず、あまり興味本位で余計な質問をしないように、そんなスタンスでいるように、と冷泉添華さんや拭乃さんから強い口調で教わっていた。

わたしは、そのお話は当然のことだと思つた。

もちろん、お世話になつてゐる身だ、といふこともあるし、このお屋敷ではいちばんの新米だ、といふこともあるけど、それら以上に理解できる部分もある。

といふのは、わたし自身が、逆の立場といつもの経験していたからだ。

お父さんの事件があつて、マスクのひとたちが、『知る権利』なるものをふりかざし、あらゆる意味で一方的な質問を、わたしに嫌といふほどあびせかけてきた。

興味本位の余計な質問といふものが、どれほどひとを傷つけるのか、わたしはわかつてゐるつもりだった。

だから今だつて、のどまで出かけた言葉を、じっくりしてがまんした。

どんなに知りたいからといって、簡単に訊いてよい、といふものではないのだ。

そんなわたしの内心を、輪さんは表情から読み取ったのかもしない。トレードマークになつてゐる丸メガネの位置を直すと、輪さんの方から話題をふつてくれた。

「お嬢さまの専用車が、いつの間にか一台になつてゐるから、ビックリしたスか?」

「え、え……まあ……そ、そんなところです」

顔のわりに大きな丸メガネの奥で、輪さんの目が笑っていた。「そんなにおつかなびっくりでなくても良いですよ、別に秘密つていうわけじゃないスから」

「よかつたです、よ? それを聞いて、とっても安心しました」「で、どうスか? ゆきちゃん」

「どう、とは?」

「この一台、同じものに見えるスか?」

一瞬、輪さんの質問の意味がよく分からなかつた。けれども、わたしはちよびり考えたあとで、一台の真っ赤な高級車を見比べて、正直に答えた。

「そう、ですね。ナンバープレート以外、同じようになります、よ?」

「よし、それならオッケースな。じゃあ、お茶をいただきにいくスね」

わたしの頭には、まだハテナマークが点灯していただけれども、輪さんの方がすぐに話題を変えてしまつた。

「ところで、洗濯機の調子はどうスか?」

「あ、それなら、流瑠ちゃんが調子良いつて言つてましたよ。すごく喜んでました」

「そつスか。でもあれ、年代物スから。私がしたのは応急処置スから、そのうちまた調子悪くなるかもスね。早めに業者さんを呼んだ方が良いかもスよ」

「年代物ということは、かなり古いものなんです、か?」

「お嬢さまが生まれた年に買ったみたいスな」

「それは……」と言いかけて、わたしは言葉につまつた。ここで古いとか年代物とか言つと、間違いなくお嬢さまに非礼であるにちがいがないからだ。

そんな、どきどきしているわたしの様子を見て、輪さんは一やりと笑つた。

しばしの間、みんなで休憩しながら、菜花さんが淹れてくれたお茶をいただいた。

『休憩をしつかりとることも、大事な仕事のひとつです』

このお屋敷にきたとき、秘書の冷泉添華さんから、わたしはそう教わった。最初は意味がよく分からなかつたけれども、今なら何となく分かる。

つまり、メイドさんには基本的にお休みがない、ということなのだ。

いちおひ、労働基準法にもどづいて、週に一度はお休みが入ることになつてゐる。でも型どおりにお休みが取れないのは、どうみても明らかなのだ。

たとえば、料理を担当している鍋島菜花さんのお休みてしまえば、お料理を作る人がいなくなつてしまつ。もちろん、わたしを含めた他の四人は、まったく料理ができるわけではない。それでも、まかないならば何とかなつても、お嬢さまのお食事だけは、もうどうにもならない。外で作つてもらつたものを持つてくるか、あるいは料理人さんに来てもらつて、作つてもらつうことになる。

今のところは、お嬢さまが気をつかつて、週に一度は外食をしてくださつてるので、なんとか菜花さんはお休みが取れている状況なのだ。

これは運転手の丸田輪さんにも言えることで、お嬢さまの方から、『お出かけしない日』というのを決めていただいて、そこに休みを入れてゐる。

お屋敷はお庭がとても広いから、掃除担当の清水拭乃さんにつて、ほとんど余裕はない。洗濯担当の河野流瑠ちゃんはすこし余裕があるけど、そもそも彼女はまだわたしと同じ中学生だし、三年生だから受験も控えているはずなのだ。新学期になれば、色々と手

一杯になるにちがいなかつた。

だからこそ、休憩なのだと思つ。もともとギリギリの状況なのだから、誰かが体調を崩すと大変なことになつてしまつのだ。体調管理は、万全でなくてはいけない。

「最悪の場合はさ、まあ応援を呼べない」ともないと思つけどさ」  
拭乃さんがお茶をすすりながら言つた。「このお屋敷のしきたりをよく知らないやつが来てもさ、つまといかないだろ？ 結果的に、お嬢さまに迷惑はかけることは、したくないぜ」

わたしはうなずいて、カップを口に当てた。

さすがに大内家はお金持ちで、使用人が飲む紅茶もおいしくものを使つてゐる。どこがどう、と詳しく訊かれると困つてしまつけど、おいしいのだけは、わたしでもわかる。それくらいのはつきりとしたちがいが、そこにはある。

不意に、使用人用の食堂の壁が、「コソコソ」と軽く叩かれた。みんなの視線が集まる先に五人目のメイド服の女性があらわれる。

「あらあら、みなさんここに居たのね」

「あ、智恵先生。なにか用です、か？」わたしは、ぴょこんと立ち上がつた。

そんなわたしの様子を見て、安国寺智恵先生が、おつとりと笑つた。「そうじゃないわ。わたくしもお茶をいただこうかしら、と思つてここにきましたのよ」

「え？ でも、さきほど安国寺先生の分も含めて、お嬢さまのところへ三人分をお持ちしましたよね？ ……もしかして、お茶に何か問題でもありましたか？」菜花さんが、すこしだけ目をまくるくして、おさげを揺らしながら訊いた。

「うん、そうじゃないわ」智恵先生が、もう一度笑つた。「どうやら、おふたりだけでお話しされたいことがあるみたいで、あたくしは席を外してきましたの。それで、お茶をいただきそこねてしまつて」

「そうですか、それならすぐご用意しますね」菜花さんが、ホッと

した顔になる。

わたしも手伝ひ、むつひとり分のお茶を用意すると、智恵先生に渡した。

智恵先生は、みたびおひとつと笑った。「あらがとく、小雪さん」智恵先生は、じるじるメイドさんの中では、こちばんの古株になるらしい。

古株、といつても、まだ二十代半ばのはずだった。お嬢さまが外出される際には、当然のように添華さんもおともをするので、おふたりが不在のときには、智恵先生がメイド長のようなかたちで、ご指示を出されることになる。そんな立場のひとだ。

そう言えば、わつき『小雪さん』と呼ばれて思い出したけど、このお屋敷のひとたちは、わたしのことを呼びたいよつに呼ぶ。

拭乃さんが『雪ん子』で、菜花さんが『こゆちゃん』、流瑠さんが『ゆつやー』となる。ついで輪わんが『ゆきりやん』で、智恵先生が『小雪さん』になる。

はじめのうちはかなり戸惑つたけど、慣れてくると逆に楽になった。名前を呼ばれたとき、誰に呼ばれたのかすぐに判別できるからだ。

ちなみに、お嬢さまと添華さんは『陶さん』と苗字でお呼びになるのだが、このふたりに直接お呼びいただくような機会はほとんどない。幸いなことに、呼ばれてしまつようになことは（まだ）何もしでかしてはいなかった。

おいしそお茶と、おいしそお茶菓子。

しばらくの間、六人が集まつた食堂で、歓談が続いた。

ゆるゆるとした、暖かくておだやかな時間が流れしていく。ここにきて良かつたかもしれない、とわたしは心から感じていた。ティー・ポットが空になつたところで、みんなが仕事に戻つていく。いつもと変わらない日常、このときのわたしは、そんな風に考えていた。

風雲急を告げたのは、太陽がいちばん高くなつた頃だつた。お庭をせつせと掃いていたわたしは、突然、清水拭乃さんにつかまつた。

「雪ん子、いそいで菜花の手伝いをしてくれ」

「あ、そろそろお昼」はんですもんね」

「そんなことじやねえよ！」

こんなに険しい表情の拭乃さんを見るのは初めてだつたので、わたくしは思わず固まつてしまつた。返事をしようとしたが、うまく声が出ない。

そんなわたしを見て、拭乃さんがバリバリと頭をかいた。「……大声出して悪かつたな。だけどな、ちつとばかしマズイことになつたんだ」

「え、え……や、菜花さんが倒れてしまつたと、か？」

「菜花には悪いが、その方がまだ気が楽だぜ。あのな、雪ん子、よく聞けよ。」主人さまが急に来ることになつたんだ」

「……？　『』しゅじんさま』？」

「お嬢さまの、お父上のことだよ」

お嬢さまのお父さんについては、ここにお世話になるとき元々、秘書の冷泉添華さんから最低限のこと教えてもらつていた。

大内義貴。

たつた一代で財をなしどげた、大内コンツェルンの総帥。

とてもお忙しい方でもあるし、お嬢さままでさえお会いするときは『本邸』の方へ出向かれるので、まあお会いする機会はないでしょうが、というのが、添華さんの説明だつたと記憶している。わたしは我慢できなくなつて、拭乃さんに訊いた。

「あの、怖いひとなんです、か？」

「あれは怖いなんてもんじやねえな。覚悟しといた方が良いぜ」

そう言われてお尻をたたかれたわたしは、小走りにお台所に向かつた。そこにいた、鍋島菜花さんの顔もすこし緊張している。

「来客用の、いちばん高いティーカップを出したいの。戸棚の奥にあるから、手伝って。ゆっくりで良いから、絶対に壊さないようにな」

わたしは返事をすると、菜花さんを手伝つた。

戸棚のガラス戸にうつる自分の顔も、いつの間にかとても堅苦しいものになつていて、まるで別人のようになつているのがわかつた。ふたりで何とか無事に作業を済ませたあたりで、廊下の方から、一種類の靴音が聞こえてきた。片方は音が高いので、冷泉添華さんのヒールのものだとわかる。

その添華さんが、お台所の入口までやつてくると、腕組みをして中を一瞥した。「鍋島さんと、陶さんのふたりだけ?」

「はい、そうです」菜花さんが応じる。

添華さんは仮面のような表情で続けた。「河野さんは? 見てな

い?」

「申し訳ありません、わかりかねます」菜花さんが、軽く頭をさげる。

添華さんの鋭い視線が、わたしの方に向けられた。「陶さんは、ご主人さまにお会いするのは、はじめてですね?」「え、え……そ、そうですけど」

おりおりしているわたしに構わず、添華さんは隣にいる智恵先生の方をむいた。「河野さんも、おそらく、はじめてですね?」

「そう思いますわ。ご主人さまがお見えになるのは、一年ぶりですから。外でお会いしていない限り、はじめてになりますわね。……流瑠さんのこと、探してきましょうかしら?」

緊張しているが、柔らかさを残している声で智恵先生が応じる。「お願いするわ」

添華さんが首肯すると、左手首の内側にある時計を見た。

「それから陶さんは、五分後に私の部屋にきてください。ご主人さ

まへの」応対の手順やお作法に関して、話をします

「あ、あ……は、はい、わかりました」

廊下に向かいかけた添華さんが立ちどまり、首だけをこちらに向けた。

「それから先に言つておきますが、ご主人さまの前で、そのような返事をしないように。はつきりしない態度を、ご主人さまは大変に嫌つておりますので」

「ごくりと唾を飲み込んだわたしの耳に、遠ざかるヒールの音だけが聞こえていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9657z/>

---

BHT ~隻眼の天使~

2012年1月5日22時46分発行